



東北人類学論壇 第3号 誌上討論 沼崎一郎「現実共同体、架空の政体-台湾社会の変容と『新しい台湾意識』の出現」へのコメント

著者	上水流 久彦
雑誌名	東北人類学論壇
号	3
ページ	49-56
発行年	2004-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/56258

誌 上 討 論

沼崎一郎「現実の共同体、架空の政体—台湾社会の変容と『新しい台湾意識』の出現」 （『東北人類学論壇』1号、19-29 ページ）へのコメント

上水流 久彦

人々が国家をどのように想像するかは、民族ナショナリズムの問題等に見るように現代社会では複雑かつ重大な問題である。台湾にも本省人（戦前から台湾に住んでいた漢人とその子孫）と、外省人（戦後国民党と台湾に渡ってきた漢人とその子孫）との争い（「省籍問題」、「省籍矛盾」）や、漢人系台湾人による「原住民」¹への圧迫などが存在してきた。沼崎一郎氏の「現実の共同体、架空の政体—台湾社会の変容と『新しい台湾意識』の出現—」（『東北人類学論壇』第1号:19-29。以下、「沼崎論文」）はこれらの問題に対して「新しい台湾意識」の出現という新たな知見を提示するが、本稿では沼崎の議論を台湾漢人の自画像の形成過程の点から論評したい²。

沼崎論文は台湾住民の認識が台湾の経済発展と結びつけられて分析されており、それが重要な特徴となっている。まず、沼崎は、台湾の急速な経済成長が台湾の人々の生活を有機的に結びつけたという。1950年代には自分の村から出ることさえ多くなかったが、現在は物流のつながりはもちろんのこと、多くの人々が観光や宗教活動で台湾各地を訪れ、就職や進学で台湾を移動し、食生活の安全のために住居地以外の環境問題にも目を向けるという。購買活動でも台湾の伝統的な商品を買えば、セブンイレブンやデパートなど戦後生まれた海外資本による商品も買う。「本省人」と「外省人」の結婚も増え、観光などを通して台湾漢人が原住民の慣習にふれることも増えたと述べる。すなわち「台湾全体が、共通の、そして単一の生活の場となってきた」のであり、「台湾全土の出来事が、庶民の暮らしに重大な影響を持つようになり、その結果庶民の関心の的になってきた」のである（沼崎 2002 : 21）。

沼崎論文によれば、このような経済発展に伴う人々の意識は、新たな台湾意識を生み出した。その特徴は、「あるがままの台湾を直視し、あるがままの台湾をアイデンティティーの源として肯定的に捉えている点」であり、「『外省人』も『本省人』も、『漢民族』も『原住民』も、『伝統』も『近代』も、全てが雑多に混在する台湾を容認する」ことである（沼崎 2002 : 18-19）。それは、国民党の政治的理念である「中華民国は中国本土も支配するのであり、台湾はその領土の一部であり、仮

¹ 「原住民」は、台湾に漢人が移り住む前から台湾に住んできたオーストロネシア語族の人々である。彼らは清朝時代、「蕃」という蔑視的な意味を持つ文字によって漢人から呼ばれていた。現在は、もともとの住民という意味から「原住民」と自称し、他称されている。台湾の全人口の約2%を占め、12の民族からなるとされる。

² 本来ならば、「新しい台湾意識」は後述する沼崎の定義にもあるように「原住民」を含むものであり、「原住民」の視点からも考察すべき問題である。だが、それは漢人を中心に研究している筆者の能力を超えるものであり、本稿では「原住民」からみた「新しい台湾意識」については述べない。

寓である」という認識とも異なり、また一部の台湾独立派が掲げる外来政権である国民党と外省人を排除した「純粹」な台湾とも異なる、台湾の現実に基づく台湾意識である。「中華民国」という「架空の政体」ではなく、実際の台湾に基づく「現実の共同体」に依拠する意識である。そして、沼崎は、現実に基づく「新しい台湾意識」は台湾を肯定する点で台湾の『脱周辺化』を可能にし、多元性を許容するという点で『中原』の多様性を招来するとまとめる(沼崎 2002: 27)。中国本土を中心とした「中華」思想の一部をなす「周辺」として台湾が存在するのではなく、中国本土への希求と結びつかない台湾自体の肯定は、台湾の中華文明からの緩やかな自立を可能にするのであり、そこに沼崎は多元的な「中華」システムが生まれる可能性を見いだす。

この沼崎論文の重要な意義は、まず「人々の生活世界が台湾大に広がっていること」を指摘する点である。この指摘は、現代の台湾を知っている者にはあまりにも当たり前のことに思えるかもしれない。1980年代以降、台湾でフィールドワークを行った者が見た現実には、台湾大の生活世界に暮らす人々であったはずである。筆者の長期調査の時期(1990年代半ば)には、台北と高雄の間で、30分に1本飛行機のシャトル便が飛んでおり、多くの人々が台湾各地から職や進学のために台北に移り住んでいた。「春節」などにはその故郷に帰る人々によって台湾のあちこちで車の渋滞が引き起こされ、帰省ラッシュがニュースとなっていた。今世紀に入ると、書店では台湾各地(北は九份から南は墾丁、東は蘭嶼に西は金門まで台湾全土の観光名所)の観光ガイドブックが売られるようになった。セブンイレブンには「宅急便」が整備され、台湾のどこでも届けてくれる。

「族群(ethnic group)」を超えたつき合いも一般的である。学校や職場では当然ながら、若い世代であればあるほど、外省人と本省人の通婚率も高く(Wu 1994)、様々な観光を通して漢民族が原住民と出会うことも少なくない。台北など大都市のビル等の建設現場には原住民の姿も多い。原住民の多くが元来集住していた花蓮県、台東県、屏東県に住む者は、原住民総人口の半数にも満たない(台湾通信 2003b: 6-7)。

1950、60年代のように多くの人々が自分が住む地域のなかだけで暮らしていくことは到底不可能であり、台湾の各地におきる出来事はまさしく自らの生活に関わってくる可能性が十分にある。したがって、沼崎論文で指摘される台湾大の生活世界の確立、すなわちお互いに影響を及ぼしあって生活せざるを得ないような空間として台湾があることは、筆者も沼崎に同意する点である。だが、これまでの民族誌の記述や論文において、台湾大の生活世界の確立はほとんど言及されてこなかった。多くは親族などの特定のテーマを扱ったり、調査地域の世界のみを取り上げるだけであった。研究する対象の人々がどのような空間に存在しているかは軽視される傾向にあった。

二つ目の意義が「新しい台湾意識」の指摘である。台湾を語る場合、しばしば外省人と本省人の対立が取り上げられる。だが、対立の側面が強調される嫌いがあるのも事実である。そのような風潮のなかで「新しい台湾意識」を指摘することは、あるがままの台湾を捉えるという点において必要な作業である。

筆者自身も、「台湾に住む人が台湾人である」という説明を外省人からも本省人からもしばしば聞いた。筆者は台湾調査中、台北のYMCAにしばらく閩南語を学びに通った。そこには日本人に加えて外省人が多く来ていた。そのなかの20代半ばぐらいの外省人2世の女性は、筆者との会話のなかで「台湾人とは台湾に住んでいる人であって、外省人も台湾人だと思う」と語ってくれたことがあった。また、台湾の独立運動を支持する40歳代半ばの人物は、筆者の「台湾人とは誰のことですか」という質問に対して、「台湾人とは台湾に住んでいる人のことで、外省人も本省人も関係ないよ。山に住んでいる人（原住民のこと）もそうよ」と応えてくれたことがある。沼崎は、「新しい台湾意識」の有り様を「『外省人』も『本省人』も、『漢民族』も『原住民』も、『伝統』も『近代』も、全てが雑多に混在する台湾を容認する」と述べるが、まさしく外省人も本省人も原住民も同じ「台湾人」だと彼らは述べるのである。このような意識が一部の人に広がっていることは事実である。

最後に台湾ナショナリズムの分析にみる意義である。これまで台湾人ナショナリズムに関する問題は、主に政治的な側面から論じられてきた。例えば、沼崎のいう「純粋な台湾」人意識は、日本の植民地支配や二・二八事件などの政治的出来事や政治制度の民主化のなかで論じられてきた（若林1992、2003；何1999）。戒厳令解除以前の台湾ナショナリズムの担い手の多くが近代的な教育を受けた知識人であり、彼らへの政府の対応が「純粋な台湾」と「中華民国」との争いと等価であったことに鑑みれば、それは当然であった。

しかし、現在の台湾の状況进行分析するにはそれでは不十分である。台湾ナショナリズムを肯定するにしてもそれを否定するにしても、現在の台湾社会に見られる「台湾をどのように考えるか」という意識は、以前とは異なって知識人や政治家などのエリート層だけの問題では決してない。足ツボマッサージをしながら、結婚式の宴会に参加しながら、家庭でテレビニュースを見ながら、あらゆる人々があらゆる場所で台湾のあり方について語る。その広がりを支える仕組みを考える必要があり、この点は決して政治的な要因のみでは説明できるものではない。沼崎の議論は、「台湾を考える」という意識が一般大衆まで拡大した要因を、「生活世界の台湾大」の成立から論じる点で、政治学的な分析が持たざるを得ない欠陥を補うものである。沼崎論文は、台湾ナショナリズムなどそれに一連する議論において、政治や経済とは異なる生活世界に基づく議論の領域を開いたのである³。

このように「台湾を考える」というレベルでの「新しい台湾意識」が台湾の一般大衆にまで広がった要因として「台湾大の生活世界の広がり」を考えるならば、沼崎の指摘は今後、十分検討する価値のある仮説である。

しかしながら、「あるがままの台湾をアイデンティティーの源として肯定的に捉え」、「『外省人』も『本省人』も、『漢民族』も『原住民』も、『伝統』も『近代』も、全てが雑多に混在する台湾を容認する」という意味での「新しい台湾意識」の成立を「台湾大の生活世界の広がり」から考え

³ この他、省籍問題（本省人と外省人の争い）に関して張茂桂も日常生活へ注目している（Chang 1994、張 1992）。経済システムや政治システムとは別の領域でおこる本省人と外省人の生活世界での交渉を問題にする。

るならば、その点に関してはさらなる詳細な検討が必要である。「台湾大の生活世界のひろがり」が現在の台湾を肯定的にとらえることを十二分には説明しないからである。

「新しい台湾意識」以前には「古い台湾意識」が存在した。その意識は3つの要素からなる。ひとつは、国民党の基本的な考え方と同じ「台湾は中華民国の一部である」点である。二つ目は、「台湾をアイデンティティーの源として肯定的に捉えることができないこと」である。別言すれば、中華文明の果てにしかない「台湾文化」の位置づけというものである。最後は、中華民国国民という存在である。そこでは外省人や本省人、漢民族と原住民という違いは捨象される。このように「新しい台湾意識」に対照される「古い台湾意識」とは、中国本土を支配した架空の政体のもと中華民国国民という中華文明を担う同質の人々からなる国家の一部としての「台湾」というものである。

実は、この「古い台湾意識」は台湾の「光復」（当時の中国政府に台湾が日本から返還されること）⁴直後、本省人に受け入れられた可能性がある。例えば、日本の植民地支配が終わり、みずからの祖国へ戻り喜んだと光復直後をふり返る本省人は多くいる。また、光復直後の台湾の新聞に日本語で「中国語を教えます」という広告も存在した⁵。そこにはまさしく台湾は中国の一部であるという本省人の認識があった。ひとときであれ、「古い台湾意識」を本省人は受け入れようとした。

だが、この「古い台湾意識」が台湾全土を覆うことはなかった。そもそも台湾をアイデンティティーの根源として肯定しないことは、本省人の立場からすれば到底受け入れられるものではなかった。例えば、1948年頃の『自立晩報』という新聞記事には、外省人のことが「内地人」と記されているが、この表記は「中国本土が中心であり、台湾はその周辺に過ぎない」という外省人の意識を如実に表している。このような意識の具現化とも言えるその後の国民党の支配は、本省人の外省人や国民党への反感を招いた。具体的には、台湾の祖国復帰と言いながら、政治的要職は外省人がほぼ独占した。また無能な外省人の管理や警察官も多く、賄賂などで社会風紀が乱れ、食糧事情の悪化やインフレを招き、市民生活を圧迫した。さらに外省人は本省人を日本の教育によって奴隷化したとべつ視し、信用しなかった。このため本省人は日本人の離台と外省人の来台を「犬が去り、豚が来た」と揶揄した。日本人なら番犬にはなったが、外省人は食べるだけで少しも役に立たないという意味である。

さらに1947年の二・二八事件が両者の溝を決定的にした。二・二八事件では、多くの本省人が国民党政府によって捉えられ、虐殺された。それはその後の白色テロへと引き継がれていく。そこで形成された溝はその後国民党政策によって強化される。例えば、そのひとつが言葉の問題である。国民党政府は、中国語を「国語」とし、閩南語や客家語を話すことを学校で禁じた。また、台湾の祭典に規制を加え、台湾の文化を尊重しない政策を行ってきた。さらに言語の違いはその溝を維持するように作用した。外省人は基本的に国語である中国語（北京官話）を話し、本省人は閩南語もしくは客家語を母語としていたため、両者の交流は阻害された。それだけではない。台湾では、本省人が話す言

⁴台湾人（本省人）には二・二八事件にみるように何ら「光」をもたらさなかったと主張し、この言葉を用いることに反対する人々もいる。

⁵1945年9月1日や19日の『台湾新生報』にみられる。

葉を「台湾国語」として侮蔑することがしばしばある。閩南語に捲舌音がないため、中国語の捲舌音を本省人の大多数を占める閩南人がうまく発音できないのである。このような政策、態度をとる国民党政府や外省人に対して大きな不満を本省人は持った。

このような状況は「反中国」の感情を本省人に生じせしめた。その意味することは、中国本土という「中国」ではなく、台湾を領土の一部としか見なさない国民党政府や外省人という「中国」への反感であった。戒厳令解除以後は、沼崎が指摘するように「一部の台湾独立派が掲げる外来政権である国民党と外省人を排除した『純粋』な台湾」に基づく「純粋な台湾意識」が急速に表面化し、1990年代初頭には「古い台湾意識」、「純粋な台湾意識」の二つが対立して存在するようになった⁶。

「古い台湾意識」や「純粋な台湾意識」を持つ人々が「新しい台湾意識」を持つようになるには、三つのことが必要である。「古い台湾意識」を持つ人々にとっては、中華民国が中国本土まで支配するという理念を捨てることであり、その一部としての台湾という意識を否定することである。二つ目は、「純粋な台湾意識」を持つ人々が外省人も含めた台湾を認めることである。最後が台湾文化の肯定であり、中国の文化にも劣らない我々の文化意識を持つことである。これらが達成されて初めて、沼崎の述べる「あるがままの台湾を直視し、あるがままの台湾をアイデンティティの源として肯定的に捉え」、「『外省人』も『本省人』も、『漢民族』も『原住民』も、『伝統』も『近代』も、全てが雑多に混在する台湾を容認する」「新しい台湾意識」が生まれる。

だが、台湾大の生活世界の広がりや、これらの三つを可能にすると考えerことはかなり困難である。居住地域以外の台湾の出来事が自分の生活に関わるという実感が、外省人に「架空の政体」を、本省人に「台湾の純粋性」を捨てさせ、中国本土への優越感を台湾の人々に持たせることを説明できないからである。実際の生活のあり方は必ずしもあるべき姿までをも規定はしない。むしろ、「新しい台湾意識」の出現は、「中華民国」と「純粋な台湾」との争いの起源の忘却や、中国本土との接触によって可能となる。

まず、最初の点だが、大統領選挙の応援では熱烈に統一を唱える政党を応援する人々、独立を応援する人々を見ることができ、老世代の人々も多い。そこには、過去のものとはなり得ない彼らの台湾での経験が存在する。国民党ともに台湾に渡ってきた第一世代の外省人は現在も自らの生活世界を台湾だけに限定することはできない。事実、筆者が接した外省人一世の多くが、自らの故郷から引き離された悲しさ、本土に戻り自らの家族や親族と会いたい希望を述べていた。つまり、台湾だけではなく、中国本土を含めた地域までが「われわれ」の国家であるという。したがって、「中華民国」を台湾だけに限定することに対して、激しく反対するのは当然でもある。そして、老世代の外省人は故郷に帰ることを生きている間にはできないと知りつつ望み、自ら台湾でよそ者として扱われていることを嘆く。

⁶外省人や本省人のあり方は多様であり、両者の間に様々な交流がある。したがって両者を対立的に描くことはその多様性を無視するため、しばしば省籍問題の深刻化に荷担すると批判される。だが、その問題を抜きに「新しい台湾意識」は考えられず、本稿では「本省人と外省人」という枠組みを取った。

他方、本省人の老世代は「チャンコロ」や「支那人」という言葉を使いながら、外省人を否定し、自らが受けた傷を語る。現在でも二・二八事件を経験した本省人の多くは、「台湾人」に外省人を入れないことが多い。ある独立派の人物は、「台湾人は原住民と閩南人と客家人と、外省人の二世」だとしてよく語っていた。筆者が「一世は入らないのですか」と聞くと、決まって「一世は入らない」と応えた。また、政治的には独立でもなく統一でもない本省人の知人は、決して「国語」を話すことはない。突然、外省人から泥棒扱いされ、殴られたできごとがあり、覚えることを拒否したという。

このような互いの疎外は、彼らの世代において簡単になくするとは考えられない。省籍の違いに基づく感情的結びつき（「省籍情結」）は、彼らの実際の体験に裏付けられた問題であり、現在の生活システムが変化したからといって簡単に解消されるものではない。逆に二・二八事件等の記憶の掘り起こし作業が進んでいる現在、その作業によって対立が強化され、次世代に継承される可能性すらある⁷。

あるがままの台湾の受け入れは、したがって彼らではなく、二・二八事件や白色テロ等の対立の要因を体験していない次世代の台湾の人々によって、少なくとも可能となろう。事実、世代が下がるにつれて外省人と本省人の通婚率は高くなってきている⁸。また、外省人の二世や三世にとって中国本土は見たこともない土地であり、それ以上に台湾に愛着を感じるという若者も多くいる。本省人の若い世代には、筆者の調査時の実感からしても前の世代の本省人と比べてはるかに外省人との付き合いが多い。

このように「純粋な台湾意識」と「古い台湾意識」からの脱却は台湾大の生活世界の確立ではなく、そのような意識を持つにいたった経験の有無、つまり世代の違いから説明される。世代が下がるにつれて、外省人にとって「架空の政体」は第一世代と違って自分の生活において意味を持たなくなり、本省人にとっては経験に裏付けられた外省人に対する憎しみは存在しなくなる。

次に中国本土との接触だが、本省人の人々が台湾滞在中に筆者に対してしばしば述べたことは、「（中国）大陸文化の遅れと貧しさ」である。1987年以降、中国本土への渡航が解禁される。彼らは仕事や観光、またテレビなどで中国本土の様子を知るたびに、「大陸（中国本土のこと。台湾ではしばしば中国本土はこのように称される）」が「不便であること、豊かではないこと」を語るのであった。中国本土に工場を建てたある社長は、中国本土が法治国家ではなく、すぐ賄賂を要求することなどをよく嘆いていた。中華文明の中心であるとされた中国本土は自分たちよりも遅れていたというわけである。このような実際の体験に基づく考えは、台湾は中華文明の周辺ではなく、中華文明の中心地である中国本土と比較しても劣っていないのだという意識を生み出した。最近では「大陸妹（中国本土からの女性）」が風俗産業で働くために台湾に密航することも、一部の台湾住民の中国本土への優越感を支えている。さらには、古いものが文化大革命などによって破壊され、否定された「大

⁷2004年3月に行われた大統領選挙では、選挙応援の集會に若年層、中年層も多く参加していた。この点を考えると対立が継承される可能性は否定できるものではない。

⁸この他、教育程度もその緩和に有効に作用する可能性が指摘されている（Wu 1994）

陸」を見るにつけ、台湾は中国の古い文化が残っていると、台湾の人々は「台湾」を語る。「大陸」では伝統文化が否定されたが、台湾にはそれが残っているというのである。「現代と伝統が根付く台湾」はこのような脈絡のなかで成立する⁹。

このように「あるがままの台湾の肯定」には、中華文明の中心というイメージを打ち壊す中国本土との接触が欠かせなかった¹⁰。「あるがままの台湾の肯定」は、「光復」直後の国民党によってもたらされた「中国」だけではなく、中国本土との接触のなかで出てきた「中国」というもうひとつの「中国」を台湾の人々が乗り越えることによって成立する。彼らの生活世界が台湾を越えて広がっていく現在（上水流 2002 : 151）、台湾の人々の認識を台湾内部だけの要因から説明することはできない。現在の台湾を肯定する意識の形成において、中国本土という「中国」と台湾の人々との関係は見落とすことができない因子である¹¹。

沼崎の「台湾大の生活世界の確立」という指摘は、国家認識の一般大衆への広がりを議論するうえで政治学と異なった視点から、有効な分析領域を提示するものである。だが、それが「あるがままの台湾の肯定」までを説明するものではない。台湾ナショナリズムで揺れている現代の台湾を考えるのであれば、国家認識にみる世代差や、一般の人々による中国本土との接触を見落とすことはできないのではないだろうか。「台湾を考える」意識が広がった現在、この問題を考察するうえで人類学者に望まれることは、外省人の、本省人の、原住民のどのような体験をした誰が「新しい台湾意識」を語っているのか、聞き取り調査を通じて明らかにしていくことであろう。

引用文献

Chang Maurkuei

- 1994 Toward an Understanding of the Sheng-chi Wen-ti in Taiwan Focusing on Changes after Political Liberalization, Chen Chung-min, Chuang Ying-chang, Huang Shu-min, eds., *Ethnicity in Taiwan Social, Historical, and Cultural Perspectives*, pp.93-150, Taipei: Institute of Ethnology Academia Sinica.

何義麟

- 1999 「『国語』の転換をめぐる台湾人エスニシティの政治化」『日本台湾学会報』1 : 92-107.

上水流久彦

⁹ 台湾と中国本土のこのような文化面での関係は、生活の物質的な豊かさによって保障され、その豊かさは1970年代の経済発展によって裏付けられている。

¹⁰ 若林は、多重族群社会への社会的次元へのインパクトとして中国本土への渡航解禁直後の台湾住民の中国本土への短期滞在を重要視しない（若林 2003 : 155）。だが、中国本土への蔑視と「新しい台湾意識の形成」に見るようにそのような滞在は重要であった。

¹¹ 「大陸」との接触はあくまでも、台湾文化の肯定に作用するものであり、外省人と本省人との対立までを解消するかどうかは、慎重な検討が必要である。

- 2002 「台湾漢人の同姓結合にみる柔軟性 ―同姓ネットワークは『弱い紐帯』か?」 吉原和男・鈴木正崇編『拡大する中国世界と文化創造【アジア太平洋の底流】』pp.145-166、東京：弘文堂。

若林正丈

- 1992 『東アジアの国家と社会2 台湾 分裂国家と民主化』東京：東京大学出版会。
2003 「現代台湾における台湾ナショナリズムの展開とその現在的帰結―台湾政治觀察の新たな課題」『日本台湾学会報』5:142-160。

台湾通信

- 2003 a 『週刊 台湾通信』92・35 台北。
2003 b 『週刊 台湾通信』92・36 台北。

Wu Nai-teh

- 1994 Convergence or Polarization? Ethnic Political Support in the Post-Liberalization State, Chen Chung-min, Chuang Ying-chang, Huang Shu-min eds., *Ethnicity in Taiwan Social, Historical, and Cultural Perspectives*, pp.151-168, Taipei: Institute of Ethnology Academia Sinica.

張茂桂

- 1992 「省籍問題與民族主義」『族群關係與国家認同』pp.233-278、台北：業強出版社。

上水流コメントへの応答

沼崎 一郎

コメントを寄せられた上水流久彦氏に、謝意を表したい。筆者の提示した「大胆な仮説」を正面から受け止め、問題点を鋭く指摘していただいたことは、筆者にとっても有益であるし、いささか大げさに言えば、日本における人類学的な台湾研究の発展にも寄与するに違いない。

コメントの要点は3つある。第一に、最も重要な点だが、仮に筆者が論じたように「台湾大の生活世界」が成立したとしても、それだけが原因で「新しい台湾意識」が生まれるとは断定できないという批判である。「新しい台湾意識」の成立メカニズムが説明されていないというわけだ。第二に、全ての台湾住民に「新しい台湾意識」が広がっているわけではないし、「古い台湾意識」も死んではいないという批判である。「台湾意識」の有り様には、世代差が大きいのではないかというわけだ。第三に、「台湾意識」の変容には、台湾内部の変化よりも、中国大陆との関係の変化が重要な役割を果たしているのではないかという批判である。台湾住民の生活世界は、「台湾大」どころか「兩岸大」に広がっているというわけだ。以下、この3点に絞って、応答を試みる。